みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

インドの手工芸と振興活動：ラバーリー社会を事例に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上羽, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009293

インドの手工芸と振興活動——ラバーリー社会を事例に——

上羽陽子

はじめに

インド西部、カッチ県では、染色・織物・刺繍・陶芸・金工・革細工・木工など多様な手工芸が盛んに行われている。カッチ県に居住し、ラクダやヤギなどの牧畜を主な生業とするラバーリー（Rabārī）の女性は自家用に刺繍技術を用いて衣裳や調度品などを制作している。

本稿では、ラバーリー社会に焦点をあて、彼らの社会における刺繍布の扱われ方とインドおよびカッチ県の手工芸振興活動とを照らし合わせながら、現代インドの手工芸の様相について考察を試みたい。

ラバーリーがつくる刺繍布

現在、インドを訪れると、土産物店やホテルなどで多くの刺繍布と出合う機会がある。それらは、実際に生活の中で使い古され骨董品として扱われているものや、販売を目的としてつくられているものなどさまざまである。

これらの刺繍布に施される多くの刺繍技術の中に、ミラー刺繍という技術がある。ミラー刺繍とは、吹きガラスの内側に溶かした錫（すず）を注ぎ込んだガラスミラーを破片にして、布に縫い付ける技術である（図1・2）。この技術はかつてインド宮廷内の刺繍職人が雲母（うんも）を用いて行っていた。しかし、十七世紀のムガル王朝時代にガラスをつくる技術が発達したため、雲母の代用品としてこの鏡片が使用されるようになり、近代では一般の人々へも広く普及している（MORRELL, 1992, pp.75-77）。

現在、このミラー刺繍は土産品として売られている刺繍布にもよく見かける技術であり、インド西部のカッチ県では女性たちによって盛んにつくられている。そして、この地方の中でも、特にミラー刺繍を得意として知ら

れているのが、主にラクダやヤギ・ヒツジなどの牧畜を行っているラバーリーの女性たちである（図3）。

現在、カッチ県に居住する民族集団の多くの女性たちは、形を整える作業や布地に縫い付けることが簡単な丸い形をした鏡片のみを用いてミラーワークを行っている。これに対してラバーリーの女性たちは、素焼きの屋根瓦に鏡片を擦り付けて、鏡片をさまざまな形へと整えることを得意としている。彼女たちは、丸形・三角形・四角形・菱形・涙形・長方形など多種類の形を生みだして、この多種類の鏡片を用いて文様表現を行っている。

ラバーリーは刺繍作業のさいに下絵を描かず、最初に鎖（くさり）縫い技法で大まかなアウトラインを布に直接施し、その後、鏡片を布に縫い付けてからその周囲の空間を徐々に多様な刺繍技術で埋めていく。したがって、さまざまな形をした鏡片を布上で再構成するデザイン力が必要となるが、彼女たちは何ら手本となる図案もなく、布の上で多種類の鏡片とその周囲に施すさまざまなモチーフを組み合わせ、まるで楽しんでいるかのように刺繍作業を進めるのである。そして、ラバーリーの刺繍布は、このような多種類の形をした鏡片を用いることから、鏡片の組み合わせによって変化に富んだデザインとなっている。

また、ラバーリーの刺繍布は、各自の女性の蓄えている限られた糸の中から刺繍を行うため、一つのデザイン

図1　素焼きの瓦に擦り付けて鏡片を形作るラバーリー女性

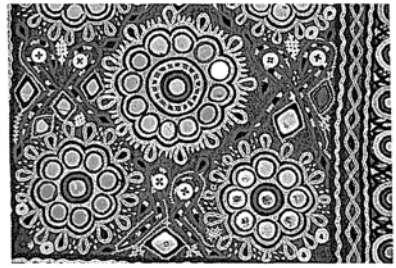

図2　丸形や菱形の鏡片を用いた花鳥文様のミラー刺繍。よく見ると鳥の向き合っている角度や大きさが異なっている。

の左右の色が異なっていたり、一つの模様の中で途中から糸の色が変わっていたりすることもある。一見すると、ちぐはぐしているようなデザインや配色ではあるが、じっくりみると全体的に伸び伸びとした大らかな魅力ある刺繍布となっている。

彼女たちが現在のように多様な刺繍技術による文様表現を盛んに行うようになった根底には、もともと彼女たちが伝承してきた文様の存在がある。ラバーリー社会は文字を持たない無文字社会である。そのような状況において、ラバーリーにとって文様は文字のかわりになる重要な存在となる。母から娘へと伝えられた文様にはそれぞれの深い意味を含んでいるのである。

彼女たちは住居の内壁に、土と家畜の糞を混ぜた泥と鏡片を用いた壁面装飾を施している。この壁面装飾にはラバーリー独特の文様が数多く描かれている。また、彼女たちは身体に入れ墨を施し、その文様もラバーリー独自のものである。つまり、女性たちは確固たる自分たちの文様をもっているため、一度刺繍技術を習得してしまえば、描きたい文様はすでに決まっているため、今まで壁面に描いていたものを布の上に移し替えて描き、さらにアレンジを加えていくことを容易に行うことができる。

また、このようなラバーリーの刺繍布や刺繍技術による衣裳は、命名儀礼や婚約儀礼、結婚儀礼などの通過儀礼において登場し、結婚儀礼では婚礼衣裳と持参財としての重要な役割を持っている。

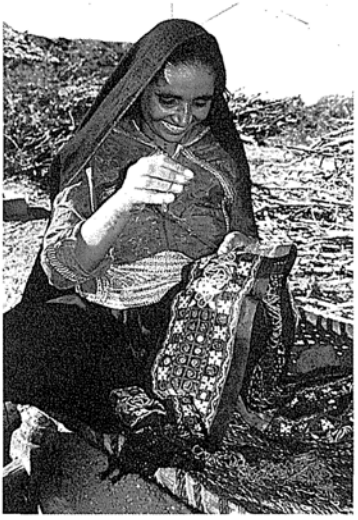

図3　ラバーリー女性の刺繍作業風景

ラバーリーはかつて幼児婚の風習で知られる民族集団であったが、現在では二〇歳前後に結婚を行っている。しかし、今でも男・女児とも三歳から七歳頃になると結婚相手を双方の親同士が決めて婚約を成立させる。また、一度婚約が結ばれると、双方に何事が起きても解消されることはない。婚約が調うと、花嫁と花嫁の母親は嫁ぎ先に持参する衣裳や刺繍品の制作を始め、結婚するまでに一〇枚から

二〇枚の刺繍を施した上衣を準備する。

そして、ラバーリーの女性が生涯の中で最も華やかな刺繍を施した衣裳を身に着けるのは婚礼時である。このときに着用する花嫁用の上衣は、全面にミラー刺繍が施され、花嫁側が用意した上衣とは区別されている。この全面ミラー刺繍の花嫁衣裳は慣習として花婿の親戚者が制作するため、用いられている布や糸の素材、刺繍技術やデザインの善し悪しによって、花嫁側の女性たちは花婿側の女性たちの技量や経済力などを評価するのである。さらに、このミラー刺繍はただの装飾ではなく、ラバーリー社会では、鏡片には邪視から身を守る力があると信じられているため、花嫁を邪視から守るための意味も持っている。

さて、カッチ県を周遊すると、村々で女性たちが刺繍を行っている場面に出くわすことがある。彼女たちの多くは、手工芸振興活動の名のもとに販売用として製作し、それらの刺繍布は業者を通じて、カッチ県をはじめグジャラート州の都市、デリー、諸外国へと販売されている。

何故、このような刺繍布が多く販売されているのか。そこにはインドにおける手工芸振興活動の歴史がある。

インドにおける手工芸振興活動

ラバーリーが行っているような刺繍や、インドにおける染色や織物・革細工・木工などといった手仕事が一般的に総称として「手工芸（handicrafts）」と呼ばれるようになったのはいつ頃であろうか。そして、いつ頃からこのような「手工芸」といった概念がインドにおいて生まれたのであろうか。インドの「手工芸」の概念の成立について金谷は明快に論じている。

インドにおいて「手工芸」という領域と概念は、皮肉なことに、インド各地で手織機で織られていた布が、英国の輸出する機械織の布との競争にすでに敗れつつあった英国植民地期に誕生した。博覧会に出品されたインドの産品をみたモリスたち英国の知識人たちは、インドの手仕事による産品に対して、英国中世期の工芸の姿を見いだし、高く評価した。モリスに影響をうけたセイロン出身のクーマラスワーミによって、インドの手仕事による造形物は、「手工芸」として論じられ、彼のインド手工芸に関する論考は独立後のインド国

家による手工芸開発に用いられる言説となったのである（金谷：二〇〇七、四六－四七頁）。

このような「手工芸」という概念のもと、インド独立後、初代首相であるネルー首相（在職 1947-64）は、手工芸と手織産業の育成を実施した。そして、一九五二年に全インド手工芸委員会（All India Handicrafuts Board）を設立し、手工芸の振興にたいしてインド政府をあげてさまざまな活動を行うようになった（PAL, 1978, p.299）。

その代表的な存在として、一九五六年、デリーにインドの手工芸品や伝統的な手織物などを収集展示した国立手工芸・手織博物館（National Handicrafts and Handlooms Museum）が設立された。ここでは、インドの各州から集めた数多くの収集品を展示するとともに、博物館の中庭を利用して、常時インドの各州から伝統的な手工芸品の職人たちを招いて実演販売を行い、インドでの手工芸品の存在をアピールした。

その後、一九六一年にはグジャラート州の中心都市・アフマダーバードに国立デザイン研究所（National Institute of Design）が設立された。この研究所は産業界におけるデザイン指導者の育成を目指し、産業界と政府への情報提供機関として活動している。特に学生は実技トレーニングを通じて理論を学び、学生自らがプロジェクトを組んで各産地に入って現地調査を自ら行い、そのレポートをもとに教師であるデザイナーと議論を交わすシステムがとられている。学生は五年間この研究所で教育を受けた後は、インドの各地にある国立のデザイン施設に入り、デザイナーとして働くことができる。またこの研究所の特徴は、最先端のデザイナーと職人との双方を指導者として招き、学生はこの研究所の中でアート性の高いデザイン教育と職人的技術との両方を学ぶことができるようになっていることである。

また、この国立デザイン研究所が設立された一九六一年には、インド全国において手工芸の実態を把握するための手工芸調査（Census of Handcrafts）が実施された。さらに、インド政府は人間国宝認定制度（National Award）を制定した。職人は人間国宝に認定されると賞金や年金、海外を含めた手工芸祭への参加資格、国が出資する手工芸の技術訓練教室を開くことができる。そのため、人間国宝に認定された職人の中には技術訓練教室で職人を育成し、その職人を下請けに使い、国から融資を受けて仕事を拡大し、経済的に成功するものもいた（PAL, 1978, pp.304-305）。

このような動きの中で、カッチの手工芸開発の基礎を作ったのは一九七二年に設置されたグジャラート州手工芸公社であった（金谷：二〇〇七、三七－三八頁）。同公社は、グルジャリー（Gurjari）という名の直売店を持ち、多くの生産者に仕事を継続させ、生計を維持させることを目的として手工芸開発の礎を築いた（同前三七－四二頁）。その後、一九七六年にカッチ県の首都ブジ（Bhuj）に手工芸宣伝広告・事業拡大センターも設立され、これらを契機にカッチ県の手工芸振興活動が盛んになっていったのである。

また、一方で一九六九年にカッチ県を襲った大旱魃の飢餓救済活動事業によって、この地方の女性による刺繍技術が注目され、女性たちの刺繍の継承を目的とした振興活動が活発になった。カッチ県における手工芸振興活動の中で、ラバーリーの刺繍布は、前述した特徴あるミラー刺繍によって、周囲の人びとから美的価値を見いだされ、注目されるようになった。そして、一九八九年にはデリーの国立手工芸・手織博物館において、はじめて、ラバーリーの刺繍布の実演販売も行われ、彼らの刺繍布が徐々に有名になっていったのである。

近年の変化

しかし近年、ラバーリーの族長は「刺繍禁止令」を発令した。[1] この禁止令は、刺繍技術による婚礼衣裳をはじめとするすべての衣裳と持参財としての刺繍布の制作を禁止するものであった。この「刺繍禁止令」の背景には、ラバーリーの刺繍布が観光客へ高値で販売されることが一つの要因として考えられる。以前は、親戚内で協力しながら準備をしてきた持参財としての刺繍布を他者へ販売してしまうことで、持参財の不足といった事態をまねき、結婚の延期や中止といったことがラバーリー社会において問題になった。

また、もう一つの要因としてラバーリーの婚姻形態の変化があげられる。ラバーリーでは一九七〇年頃まで幼児婚が行われていた。しかし、近年になり、彼らの生活が移牧から定住へと移り変わるとともに、幼児から十八歳前後に行う結婚儀礼へと変化した。そして、この変化の中で婚礼衣裳が幼児の体の寸法から成人と変わらない寸法へと大きさが変化し、それに伴って婚礼衣裳用に準備する布地の量も、刺繍を施す量も増加し、経済的負担や刺繍を行う女性たちの時間的負担が増加した。そして、婚礼衣裳はラバーリーにとって婚資であるために、婚

資の増加に伴って刺繍布による持参財も増加してきたと考えられる。つまり、「刺繍禁止令」の背景には、観光客からの影響に加えて、必要以上に負担となった婚資や持参財を懸念した族長が、ラバーリー本来の婚姻形態であった負担にならない程度の婚資や持参財といった姿に戻すべきであるという意味も含まれているのではないかと考えられる。

そして、ラバーリーの女性たちは、禁止令からはずれている運針技法とアップリケ技法によって文様表現を行うとともに、これらの技法以外にも、プラスチックやセロハンなどの素材によるレースやモール、スパンコールなどを布に縫い付ける、またはジグザグミシンによって刺繍に代わる新しい文様表現を行い続けている。さらに、このような動きの中で、カッチ県の布商人たちは、ラバーリー女性に内職を頼み、新しい素材をミシンで縫い付けたラバーリー用の既製品の衣裳を販売するようになった。そして、今まで自分自身で衣裳をつくっていたラバーリー女性が、同形態の既製品の衣裳を購入するという動きもある（図4）。

ただし、ラバーリーの「刺繍禁止令」では特例として、手工芸振興活動による販売を目的とした刺繍布の制作は許されているのである。しかし、多くのカッチ県の女性が積極的に振興活動に参加していることに対して、ラバーリーの女性は明らかにこの活動へは消極的である。この理由には外部の人が主導となってアレンジしたデザインを指定された布・色糸によって制作することや、自ら工夫をすることのできない商品としての刺繍布を制作することに対する抵抗があげられる。また、委託側も伝統的な文様を継承せず、こだわりを持っていない人びとに制作を依頼するほうが簡単であるとも考えていた（図5）。

図4　商店で既製品の娘の衣裳を選ぶラバーリー女性

つまり、持参財としての役割を持っていた刺繍布がラバーリー以外の他者からの評価の高さによって、その動きとは逆にラバーリー社会の中で禁止してしまう、また、

現在では禁止令が出たために、さらに昔のラバーリーの刺繍布が高い評価をうけ、商品としてラバーリーの文様が多く使われるようになり、それをラバーリー以外の女性が制作するという新たな動きが起きている。

二〇〇一年のカッチ県を震源地としたインド西部大地震後、インド国内外の政府やNGOがこの地域において手工芸復興活動を活発に行い、この活動の一つにラバーリーの女性たちにミシンを配付するというものがあった。その結果、現在、唯一、カッチ県の三集団のラバーリーの中で「刺繍禁止令」の出ていない一集団において、他の二集団同様にジグザグミシンによる文様表現が盛んに行われるようになってきている。また、彼らの制作する壁面装飾もこの震災により崩れ落ち、震災後、これらを小片にして販売するという新しい動きもある。

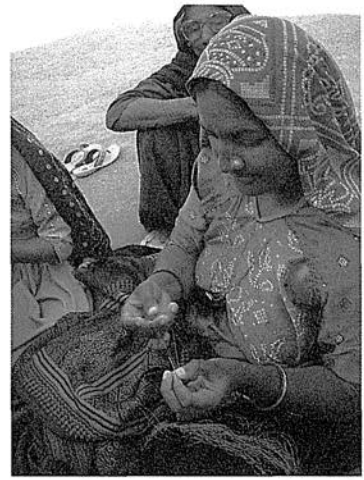

図5　委託されたサリーへ刺繍を行うアヒールの女性

このような外部の人々の認識によってそれまで継承されてきた手工芸に影響を与えるという事例は他の民族集団でも見ることができ、ラバーリーの動きは一つの事例として捉えることができる。ラバーリーは自分たちの制作する刺繍布がインド国内外において、カッチ県の他の民族集団の制作する刺繍布よりも高く評価されていることをはっきりと認識している。しかし現在、彼らは高く評価されている刺繍布の制作を止めている。この彼らの選択こそが、今日まで彼ら独自の手工芸技術を継承することのできた要因であり、ラバーリー自らの手工芸に対する確固たる意識であると考えている。

（1）この刺繍禁止令は、一九九四年にデバラヤラバーリー、一九九八年にヴァガディヤラバーリーの族長が婚礼衣裳をはじめとするすべての衣裳に刺繍を施すこと、また持参財としての刺繍布の制作をすべて禁止するというものであった（上羽、二〇〇六、一八〇頁）。

〔参考文献〕

金谷美和『布がつくる社会関係――インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』（思文閣出版、二〇〇七年）。
MORRELL, Anne, *The Techniques of Indian Embroidery*, B.T.Batsford Ltd, London, 1994.
PAL, M. K., *Crafts&Craftsmen in Traditional India*, Jayant Baxi for Kanak Publications, New Delhi, 1978.
上羽陽子『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼――ラクダとともに生きる人びと』（昭和堂、二〇〇六年）。